

第一章

さあ、ちっぽけな人間よ、しばし仕事の手を休め、騒がしい思いのかずかずから、わずかの間、身を隠しなさい。煩わしい心配事を投げ捨て、心労ばかりの緊張を後回しにしなさい。神のためにひとときの時間をつくり、ひととき神に休らうがよい。おまえの精神の奥の間に入り¹、神と神を探し求める助けとなるもの以外を閉め出せ。そして扉を閉め、神を探し求めよ。さあ、わたしの心のすべてを語りなさい。神に語りなさい。「わたしはあなたの顔を探し求め、主よ、あなたの顔をたずね求める²」と。

では、主なるわが神、あなたがわたしの心に教えてください。どこでどのようにあなたを探し求めたらよいのか。どこでどのようにあなたを見つけることができるのか。主よ、もしあなたがここにおられないのなら、不在のあなたをわたしはどこで探し求めるのでしょうか。しかし、もしあなたは至るところにおられるのなら、現前するあなたをわたしが見ていないのはどうしてでしょうか。あなたはたしかに、「近づきがたい光³」のなかに住んでおられます。ではその「近づきがたい光」はどこにあるのでしょうか。それにわたしはどのようにして、近づきがたい光に近づけばよいのでしょうか。誰がわたしを導き、その光のなかに導き入れ、その光のなかであなたを見させてくれるのでしょうか。どのようなしるしによって、どのような顔を手がかりにあなたを探し求めればよいのでしょうか。わたしはあなたを見たことがない。主なるわが神。あなたの顔を知りません。どうすればよいのでしょうか。至高の主よ、この遠い異国にさまようものは、どうすればよいのでしょうか。あなたへの愛に駆られ、しかしあなたの顔から遠くに投げ出されているあなたのしもべは、どうすればよいのでしょうか。あなたを見たいとあえいでいますが、あなたの顔は彼からあまりに遠い。あなたを見いだそうとしているが、あなたの居場所を知らない。あなたを探し求めたいという気持ちでいっぱいだが、あなたの顔を知らない。主よ、あなたはわが神

¹ 『マタイ』 6,6 だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。

² 『詩編』 26[27],7-8 主よ、呼び求めるわたしの声を聞き 憐れんで、わたしに答えてください。8 心よ、主はお前に言われる「わたしの顔を尋ね求めよ」と。主よ、わたしは御顔を尋ね求めます。

³ 『テモテー』 6,15-16 神は、定められた時にキリストを現してくださいます。神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、16 唯一の不死の存在、近寄り難い光のなかに住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることのできない方です。この神に誉れと永遠の支配がありますように、アーメン。

です。そしてわが主です。しかしわたしはあなたを見たことはありません。あなたはわたしをつくれ、つくり直されました。わたしの善いものすべてを与えてくださったのはあなたです。しかしわたしはまだあなたを知りません。そもそもわたしはあなたを見るためにつくられたのに、まだそのためにつくられたことを実現していないのです。何という不幸な人間の運命でしょう。そのためにつくられたことを失ってしまったのです。何という過酷で恐ろしい境遇でしょう。ああ、何を失い、何を見つけたのか。何が去って、何が残ったのか。そのためにつくられた幸福を失い、そのためにつくられなかった不幸を見いだした。それなしには何も幸せではありえないものが去って、それ自体では不幸以外の何ものでもないものが残った。あのときひとは、いまそれに飢えている天使のパンを食べていた⁴。しかしいまひとは、あのとき知らなかった嘆きのパンを食べている。悲しみはひとびとに共通で、アダムの子の嘆きに例外はない。アダムは飽食して吐き出し、われわれは飢えてあえぎ求める。アダムは豊かに富み、われわれは欠乏して乞い求める。アダムは恵み豊かにもっていたが失って不幸になり、われわれは不毛な欠乏にあり、みじめに乞い求めるが、手に入れることはない。神はなぜわれわれのために守ってくださらなかったのか。容易に守ることができたはずなのに。だからわたしたちは、これほど深刻な欠乏に陥ってしまった。どうして、わたしたちに光を閉ざし、闇でわたしたちを覆われたのか。何のため、わたしたちから生を奪い、死を与えられたのか。苦勞多いわれわれは、どこから追放され、どこへ押し込められたのか、考えるがよい。どこから墜落し、どこに葬られたのか。祖国から異国へ追われ、神を見ていたが、盲目になった。心地よい不死から苦く恐ろしい死に至った。何という不幸な変わりよう。何という善から、何という悪へ。深刻な罰、深刻な嘆き、何もかもが深刻。

不幸なわたし、エウアの不幸な子どもたち、神から遠ざかったものたちのひとり。わたしは何を手がけて、何をなし遂げたのか。どこを目指し、どこまでたどり着いたのか。何をあえぎ求めて、どこで一息ついているのか。わたしは善いものを求めた⁵。だがあるのは混乱のみ⁶。わたしは神を目指していた。そしてわたし自身に躓いた。わたしはわたしの隠れた奥底の安らぎを求めていた。しかしわたしの内奥で試練と悲嘆を見いだした。わたしの精神の喜びに笑うことを望んでいたが、心の嘆きにうめき声をあげてしまった。喜びを期待したが、ため息が深まっただけ。

⁴ 『詩編』 78[77], 23 それでもなお、神は上から雲に命じ 天の扉を開き 24 彼らの上にマナを降らせ、食べさせてくださった。神は天からの穀物をお与えになり 25 人は力ある方のパンを食べた。神は食べ飽きるほどの糧を送られた。

⁵ 『詩編』 121[122],9

⁶ 『エレミア書』 14,19 あなたはユダを退けられたのか。シオンをいとわれるのか。なぜ、我々を打ち、いやしてはくださらないのか。平和を望んでも、幸いはなく、いやしのときを望んでも、見よ、恐怖のみ。

主よ、いつまでですか。いつまで、主よ、あなたはわたしたちを忘れておられるのですか。いつまでわたしたちからあなたの顔を背けておられるのですか。いつわたしたちを振り返り、聞き届けてくださるのでしょうか。いつわたしたちの目を明るく照らし、あなたの顔をわたしたちに見せてくださるのでしょうか。いつあなたをわたしたちに与えてくださるのでしょうか。主よ、振り返ってください、聞き届けてください、わたしたちを照らし、あなたをわたしたちに見せてください。あなたをわたしたちに与えてください。そうすればわたしたちは幸せになります。そうでなければこれほどに不幸なままです。わたしたちの労苦を、あなたを目指そうとする努力を憐れんでください。わたしたちはあなたなしには何の力ももたないのです。あなたはわたしたちを招いておられます。だからわたしたちを助けてください。どうか主よ、わたしたちが、あえぎ求めてもただ絶望するだけでなく、希望を抱いて安堵の息をつけるようにしてください。主よ、わたしの心は自分で虚ろになり苦くなりました。あなたに和らげられて甘くなりますように。主よ、わたしは飢えて、あなたを求め始めました。どうかあなたへの飢えがなくなりますように。空腹でやってきたわたしが、食べることのないまま立ち去ることのありませんように。貧しいわたしが豊かな方のところへ、憐れなわたしが憐れみ深い方のところへ、やってきたのです。何ももたずに見捨てられて帰ることがないように。もしわたしが食べる前にあえぎ求めているなら、せめてあえぎの後には、食べるものを与えてください。主よ、体の曲がったわたしは下しか見ることができません。どうかわたしをまっすぐにして上に目を向けることができるようにしてください。わたしの不正がわたしの頭にのしかかっています。わたしの頭を包み覆っています。重荷のようにわたしを押しえつけています。覆いを取り除き、重荷を取り去ってください。不正の源がその口をわたしに向けることがないように⁷。遠くからでも、深い底からでも、わたしがあなたの光を望み見ることを許してください。あなたを探し求めることをわたしに教え、探し求めるわたしにあなたを見せてください。あなたが教えてくださらなければ、わたしはあなたを探し求めることができません。あなたがご自身を見せてくださらなければ、わたしはあなたを見いだすことができません。あなたを乞い求めながら探し求めましょう。探し求めながら乞い求めましょう。愛しながら見いだし、見いだしながら愛しましょう。

主よ、隠すことなく申します。感謝します。あなたがわたしのなかにこのあなたの似像をつくられたので、わたしはあなたを記憶しており、あなたのことを考え、あなたを愛します。しかしその似像はさまざまな過ちのために損なわれて崩れ、さまざまな罪の霧に紛れ、あなたが再生し回復してくださらなければ、そのためにつくられたことを実現できません。あなたの高みを究め尽くそうとは思いません。わたしの知解をあなたの高みと比べ

⁷ 『詩編』69 [68],15-16「わたしを憎む者から／大水の深い底から助け出してください 16 奔流がわたしを押し流すことのないように／深い沼がわたしをひと呑みにしないように／井戸がわたしの上に口を閉ざさないように。」

ることはできません。ただ、わたしの心が信じ愛しているあなたの真理を、わずかばかり知解したいのです。信じるために知解を求めているではありません。知解するために信じているのです。わたしは信じなければ知解しないであろう⁸ということも信じているからです。

第二章

というわけですから、信仰に知解intellectusを与えてくださる主よ、あなたが有益であるご存じの範囲で、わたしに知解することintelligereを与えてください。わたしたちの信じている通り、あなたがあるということ、またわたしたちの信じていることがあなたそのものであるということ。わたしたちが信じているのは、あなたが、それ以上に大きなものは考えられえないような何かaliquid quo maius nihil cogitari potestであるということです。あるいは、このようなものは存在しないのでしょうか。「愚か者は心のなかで言う。神は存在しない、と⁹」とあるのですから。しかしこの愚か者でさえ、わたしが「それ以上に大きなものは考えられえない何か」と言うのを聞けば、聞いたことを知解します。そして彼が知解したことは、たとえ彼がそのようなものが存在すると知解していないとしても、彼の知解のなかにあります。事物が知解において存在していることと、事物が存在していると知解することとは別だからです。もし画家が描こうとしている作品を前もって考えるなら、その作品を知解においてもってはいるが、まだ描いてはいないのだから、それが存在しているということはまだ知解していないのと同じことです。しかし描き終わったときには、すでに描いた作品を、知解においてもっているとともに、それが存在すると知解しています。このことから、愚か者も、それ以上に大きなものは考えられえない何か、少なくとも知解において存在すると認めざるをえないことは明らかです。このことを聞いて知解し、知解されたことは知解においてあるのですから。ところが、それ以上に大きなことは考えられないものが、知解においてのみあることはできません。だから、もし知解においてのみあるのであれば、それ以上に大きなものは考えられないものが、それ以上に大きなものが考えられるものであることとなります。しかしそのようなことはありえません。したがって、それ以上に大きなものは考えられえない何かが存在することは明らかであり、それが知解においても事物においても存在することは明らかです。

⁸ 『イザヤ書』7,9 [LXX]現行の共同訳では「信じなければ、あなたがたは確かにされぬ。」となっているが、アンセルムスが用いているような七十人訳からのラテン語訳もテルトゥリアヌス以来用いられている。

⁹ 『詩編』13[14], 指揮者によって。ダビデの詩。神を知らぬ者は心に言う「神などない」と。同 52,1 [53,02] 神を知らぬ者は心に言う 「神などない」と。

第三章

このものはもちろん、存在しないと考えられえないほど真に存在しています。というのも、存在しないと考えられえない何かが存在すると考えられえますが、これは存在しないと考えられうるものより大きいからです。だからもし、それ以上に大きなものは考えられえないものが、存在しないと考えられうるのであれば、それ以上に大きなものは考えられえないものが、それ以上に大きなものが考えられえないものではないこととなります。しかし、これは矛盾しています。したがって、それ以上に大きなものが考えられえない何かは、真に存在し、存在しないと考えられることもできないほどであることとなります。

そしてわれらの主なる神、これこそがあなたです。あなたは、わが主なる神、存在しないと考えられることもできないほどに、真に存在しているのです。これは、しかし、当然のことではありませんか。もし精神が、あなたより優れた何かを考えることができたとなれば、被造物でありながら創造者を超えた高みへ昇り、創造者について判断を下すことになったでしょうから。これはしかし、まったく不合理なことです。何であれ、ただ唯一あなたをのぞけば、他のものは存在しないと考えられることができるものです。ですからあなただけが、すべてのもののなかで一番真実な仕方、したがってまたすべてのもののなかで一番大きな仕方、存在をもっています。他のものは同じように真実な仕方ではなく、したがってより小さい仕方、存在をもっているのです。ではなぜ、「愚か者は心のなかで、神は存在しないと言う」のでしょうか。理性的な精神にとって、あなたがすべてのなかで最大の仕方、存在していることは、これほど明白なのに。彼は愚かで知恵がないからでしょうか。

第四章

いったい、彼は、考えることのできないことをどうして心のなかで言ったのでしょうか。いやむしろ、彼が心のなかで言ったことが、どうして考えることのできないことだったのでしょうか。心のなかで言うことと、考えることとは同じことではありませんか。彼が真に考えていたなら、いや、真に考えていたから、心のなかで言ったのであり、考えることができなかつたから心のなかで言わなかつたとすれば、心のなかで言われたり、考えられたりする仕方は一通りではないこととなります。事物は、それを表示する音声と考えられるときと、事物がそれであるところのもの *id ipsum quod res est* が知解されるときとは、別の仕方、考えられるのです。ですから、先の仕方では、神は存在しないと考えられることができますが、後の仕方では、不可能なのです。じっさい、いかなるひとも、神がそれであるところのもの *id quod deus est* を知解しながら、神は存在しないと考えることはできません。そのことばを心のなかで、あるいは何の表示もともなわせることなく、あるいは非本来的な表示をともなわせつつ、語ることならできるでしょうけど。すなわち、神は、それ

以上に大きなものが考えられえないものです。このことを正しく知解する人は、それが考えにおいても存在しないことはありえないような仕方存在していることを知解します。それゆえ、神がそのような仕方存在していることを知解する人は、神が存在しないと考えることもできないのです。

恵みの主よ、あなたに感謝します。あなたに感謝します。なぜなら、最初はあなたの与えてくださった信仰で信じていましたが、いまや、あなたに照らされて知解したので、わたしは、あなたが存在することを、信じなくなかったとしても、知解しないことはできないのです。

第五章

では、わが主なる神、それ以上に大きなものが考えられえないあなたは何なのでしょう。唯一自らによって存在するところの、すべてのなかで最高のものとして、他のすべてを無からつくったものに他ならないのではないのでしょうか。これでないものは何でも、考えられうるより小さいものです。しかしこのことは、あなたについては考えられえないことです。というわけですから、すべての善がそれによる最高の善に、どのような善が欠けているのでしょうか。だからあなたは正しく、真実であり、幸福であり、ないよりあることの方が善いことのすべてです。じっさい正しくあることは正しくないことより善く、幸福であることは幸福でないことより善いことです。

© Sumio Nakagawa